



“心豊かに
笑顔あふれる”

青森県
総合社会教育センター

磐

所報〈ひびき〉

No.
101

平成27年 2月19日

講座受講生ピフォーアフター
パワフルAOMORI!創造塾

工藤 一也さん



Q.受講のきっかけ

知人の紹介で「パワフル AOMORI! 創造塾」を知り、40才を前に自己啓発を図りたいと思い立ったのがきっかけでした。塾生として活動していくうちに、地域を盛り上げる活動にハマってしまい、今は、創造塾で知り合った仲間と様々な活動に参加させて頂いています。

Q.講座受講により得たもの

まず様々な活動を進める上でのノウハウ、そして何よりもネットワークが広がった事です。塾生同士のつながりはもちろん、講師の方々、実施した事業に関わる方々とのつながりは、以前の私には考えられないものです。これこそ一番の成果であり、これからも大切にしていきたいと思います。

Q.今後の目標

一人でも多くの「イクメン・カジダン」なパパさんを誕生させ、幸せあふれる家庭を増やしていきたいです。また、三沢のご当地ヒーロー「ホッキーガイ」は、まだまだ認知度が低いので、市内や他市町村のイベント等に数多く参加し、活躍の場を広げていきたいと思います。

活動紹介1 パフォーマンスライブ

塾生当時から継続しているこのライブは、演者と裏方の双方を高校生が行い、表現する喜びや世代を超えた交流を体験してもらうことを狙いとして実施しています。2月に5回目を実施しましたが、高校生と協働して1つのショーを作り上げる達成感は、何度もたまりません。



活動紹介2

イクメン・カジダン講座

三沢市の市民提案事業の補助を受け実施しています。子育ては義務ではなく今しかできない『期間限定の特権！』を楽しみながら、積極的に子育てや家事を行うパパが増えればと、昨年度から講座を始めました。受講したパパから「家でもお弁当を作って家族に食べさせたい。」「帰ったら、早速読み聞かせしてみる。」等の感想を頂き、ご家庭での様子を想像すると、ニヤけてしまいます。笑顔のパパが一人でも増えるよう、これからも活動を続けていきたいと思います。



活動紹介3 ホッキーガイプロジェクト

創造塾で講師を務めた、秋田県のご当地ヒーロー「超神ネイガー」の生みの親、海老名保氏との出会いがきっかけです。その後も塾生と海老名氏との交流が続き、海老名氏全面バックアップの下、誕生したのが「ホッキーガイ」です。

まだ、誕生したばかりの「ホッキーガイ」をこれから大活躍させていきたいと思います。



“最高の黒子日本一”を目指して

廣瀬：それでは、石岡さんの報告をしていたときみたいと思います。

石岡：秋田市から来た石岡大輔です。生命保険会社で、ライフプランナーとして仕事をしています。その合間に、ちょっとだけかい趣味というポジションで、ちゃんと仕事をしています。

急に大きな話になるのですが、僕の人生理念は、御縁のあった人が天寿を全うするときに「ああ、最高の人生だったな」と言っているだけのことです。「最高の黒子日本一」というテーマで僕は活動しています。

輪茶プロジェクトは、私の母が会計をやり、助産師の妻が子育て関係を担当し、残りの全てを僕がやるというスタイルで運営しています。いろんなジャンルのイベントをやっているのですが、僕がやりたいというよりは、誰かから、「こんなやりたいのだけど、こんなふうにやれたら面白いよね」と持ちかけられたことを、じゃあどうやればいいかなと僕が考へ、一緒にやりましょうか?といつ感じでやっています。

廣瀬：要するに、一緒に企画したり、アドバイスしたり、コソサルしたりしながらやっていくエージェントという感じですかね。これはね、いきなりやつらうじができたのではなくて思つのですよ。最初のきっかけを教えてくれませんか。

石岡：7年前に秋田市議選挙に出たことがあります。落選したのですが、その時、まおおこしこじくらい政治家でなくともさうじやつてやる、と思ったのです。それで、作家さんとかの力を借りて、おしゃれ「フローペーパー」

の中に、僕らの情報を入れていこうというのがスタートです。それから、御縁のあったお店からイベントを企画してよ、と依頼されてやつてきたことが、少しあり増えてきた感じです。

廣瀬：いい人ですね。本当に驚きました。



輪茶プロジェクト
代表 石岡大輔氏

廣瀬：なるほど。石岡さんは、自分の情報を発信するため、フリー・ペーパーを作りながらイベントをして、赤字にならない程度に受付料をもらつてこれどこうですね。少し黒字にほるようになりますか。

石岡：よく言われます。ただ、イベントの中で一番動いているのは僕ですが、一番楽しんでいるのも自分だという感覚があるので、それでいいと思っています。

廣瀬：いい人ですね。本当に驚きました。

“まちの大人の部活”

廣瀬：最後に白銀町から来ていただきました清水さんから、お願ひします。

清水：私は、八戸市の白銀町育ちで、学生時代は山形で暮らしました。地元に帰ってきて、自分達の遊び場がほしいと思ったことが活動のきっかけです。そこで、私の妄想をスケッチブックに描き出しました。それを持つて同級生に猛アタックをかけ、一人で soop! (スープ)を作ったのが始まりです。その後、同窓会でスカウトして、十人ぐらいで活動しています。

最初は、歩いて活動場所探しでした。実は、

白銀には、歴史や文化、水を中心とした文化があって、そういう魅力が集まっている場所だということに、今、大人になってやつと気づいたのです。あるいは、誰も見向きもしないような荒れた公園が見つかったのです。そこで、町内会長さんにお話したところ、何をやらせてもらつていいという感覚があるので、僕としては費用対効果が非常に高いと思つてあります。



soop!
代表 清水圭子氏

ントをしました。

先生から、瓦解といつお話をありました。この一年が正にその年でした。仲間が結婚したり、転勤したり、みんなのベクトルが変わつてしまつたのです。

お金のことに關しては、補助金とかそういうものをもらわず、自分達で資金を遣り繰りしています。実際にイベントを行うときは町内会からの賛助金などを当てにしてやつています。集まつたお金は、みんなの気持ちが同じで、集まつてあるといつこと、自分の気持ちの中に留めながら開催しています。

廣瀬：普通は、屋根のついたといふに集まつたと思うのですが、いきなり公園に活動の拠点を求めたのは、なぜですか。

清水：ハードの部分を求めたのではないか、何も人脈がなくて、も集まれる、例えば、サークルがあるよと聞かれて、行こうかなといふ気持ちになると思うのですが、その受け皿を求めたのです。

廣瀬：なるほど。“まちの大人の部活”といふ感じですかね。部活だと考へてみれば、いろいろなことがスsteenと落ちるような気がしますね。ありがとうございました。

廣瀬：今日の講座に参加している高校生や大学生のみなさんの数が、とても多いことに驚きました。青森県の未来は明るいと思います。

パワフルAOMORI！創造塾 「未来のAOMORIを地域から」 公開講座

「パワフルAOMORI！創造塾」は、その名前のとおり、元気な青森を創造する人材を育成する塾です。第3回目となる公開講座が1月10日に開催されました。この日現在としては、青森市で48年ぶりに積雪が12センチを超えて、大雪の中にもかかわらず、多くの県民に集まつていただきました。

今回の公開講座では、まちづくりのスペシャリストである宇都宮大学地域連携教育研究センターの廣瀬隆人教授をお招きして、青森と秋田の若手の活動実践者とともに、まちづくりのポイントについて、パネルディスカッションをしていただきました。「まちづくりって、どうやつたらいいのだろう」「なにから進めていけばいいのだろう」と悩んでいる方には必見です。

A portrait of Professor Hiroshi Nagase, a middle-aged man with glasses and a suit, speaking into a microphone. He is seated at a table with a bottle of water in front of him.

廣瀬：「おおいつらじこ」のせ、ひとも分かつて「あおいつらじこ」「おおなまえじこやくわい」と「おおいつらじこ」なのどか。それが四つの根元があります。

あります。せいか「文化」です。そのあたりの文化とか芸術とか、そういうこいつもの人間に人間は安定感を求めるのです。「食」と「文化」がまわりづくらを支える大きなポイントになります。

二つ目は「地域で安心して」安全に暮らせることについてやること」です。安全の問題というのは、おいかついひととの離すしじがでもあせん。最後は「地域の課題を発見して、解決する」とことです。地域と密着した地元の課題を解決していくこととながっていかなければなりません。

「子供がカメラマン」とこの生画をしました。これは、子ども達がカメラマンとして地域を取材することを通して、地域の良さとか、農業と漁業の文化とかを知つてもらおうと考えたものです。じついう形で、地域と人がつながる仕組みを作りたいと思つて、活動しています。

田村：地域活性化など、お金を先に奢うる人がいるのですが、僕はお金じゃないよと思いつきり言いたいのです。そのときに、お金と全然違うのが芸術です。芸術は、個性がある。「芸術は、一人一人が大事だよ。一人一人が作品だよ」「だから、あなたはこの地域に必要です」というところを出したかったので、「アート」にしたのです。

廣瀬：「あなたたはこの地域に必要です」と仰いましたね。それは、むづかしい意図でおっしゃいましたか。実は、おかげでこの大きなかぎり一ページなのです。

田村：一人一人は、すごく大事じゃないですか。親から見て、子どもはどんな子どもですか。すごく大事ですよね。一人一人が掛け替えのないもので、社会の中でも、君が思つておられる以上に君を大事に思つている人がいる

廣瀬：非常にいい考え方を提示していただけたかと思います。田村さんの活動は、三沢の地域エネルギーをそこに固めていく、接着剤のように見えます。それが“アート”なのでですね。“アート”とは個性があつて、人の心を大事にする、そういうキーワードをもつた言葉なのですね。

廣瀬：まわりの活動をするときに必要な人数は、四人以下なのです。それ以上になれば、瓜解する可能性が強くなるのですよ。まわりのことをスタートさせるときには、三、四人から始めるというのが鉄則なのです。

廣瀬：最後に、御家族との関係を上手く保つについてお尋ねの工夫をしていただけますか。

田村：私が家族と接して思うことは、時間の長さがイコール絆の強さとはちがうと思うのです。時間だけは取り返しがつかないものなので、家族とのコミュニケーションをしながら、きちんととした時間の使い方を決めていま

廣瀬：実は、「あなたはこの地域に必要なだ」という肯定感がとても大事なのです。「人に必要とされる」と「人の役」立つこと」「人に愛されたいこと」、「人に讃められる」と。この四つのことば、人間が生きていってためにどうしても重要なことなのです。このことが、田村さん自身の生きがいにもつながっています。お年寄りの大好きな機動力になつているのです。活動企画する人は何人ですか

田村：本当に「ア」ということにしなれば、二人

こうつてもう二三人ですね。

我がまちの〇〇自慢！

「もったいない精神が生きる社会づくり」

中泊町では、「中泊町もったいない町民運動による循環型まちづくり条例」を定め、もったいない精神が生きる社会づくりを進めています。今年度は、災害から命を守るという側面から「もったいない命、もったいない心」を啓発する「もったいない町民大会」を開催しました。その中の活動の一つ「小泊地区防災探検隊」について紹介します。

小泊地区は昭和58年の日本海中部地震の津波により、大きな被害を受けました。災害から身を守るために、常に災害を意識し、危険箇所や避難場所を確認しておくことが大切です。そこで、子ども達には自分達の住む地域に普段から目を向させ、有事の際、自分の命は自分で守ることを意識づけさせたいとの思いから、防災探検を計画しました。

防災探検隊は、子ども会の合同交流キャンプのプログラム（防災オリエンテーリング）に取り入れて開催されました。

「小泊地区防災探検隊」

キャンプ当日は、子ども会の育成者とともに町内の危険箇所を歩いて回りました。また探検後には防災マップづくりに取り組み、11月に開催した「もったいない町民大会」で防災マップを基に活動について発表し、万が一の災害に対応できるよう地域住民に対して啓発を行いました。参加した子ども達からは、「小泊の危険な場所や避難場所がわかった。自分の命は自分で守らなければいけないと思った。」という声が聞かれ、子どもたちの中にも防災に対する意識が芽生えてきているように感じました。



やってみよう！アイスブレイク

★できる！役立つ！楽しい！ ★講座・研修会・仲間づくりの場で！

☆「4つの窓(私を知って！)」(5~10分、何人でも 準備：B5判又はA4判の紙を人数分)

●すすめかた●

- (1) 紙を折って四分割し、下図の項目について書き込んでもらいます。
- (2) 記入後、その紙をもとに多くの人と自己紹介をし合います。
※ 書き込む項目に「好きな芸能人」、「好きなテレビ番組」などを設けてもよいでしょう。

★ポイント★

グループ内での自己紹介にも使えます。書いてもらう項目は、誰でも書けるものにして、研修会等の場合は、テーマに関連のある事項を入れるなど工夫するとよいでしょう。



名前 (ふりがな)	このまちの 好きなところ
最近うれしかったこと	好きな食べ物



*第100号第4面「やってみよう！アイスブレイク」において、掲載されているQRコードが正しく読み取れない不具合がありましたので、こちらをご活用下さい。



キャッチ



他己紹介

青森県総合社会教育センター

検索

〒030-0111 青森市荒川字藤戸119-7 TEL 017-739-1252 FAX 017-739-1279 <http://www.alis.pref.aomori.lg.jp/>